

## 「2015年シドニー大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部人文学科・英語学英文学専修4年 小池和輝

学習成果については2週間の派遣期間では自分の定めた水準にまで向上させることができなかった（今回の派遣での最大の目標が「英語を聞き取り、話の流れと内容を理解する」であった）。しかし「教養知識」の有無が相手の言いたいことをどれだけ正確に理解できるかを大きく左右するのだと再認識できたことは、目標を達成できなかったこと以上に大きな収穫となった。あるときは内容をほぼ100%聞き取ることができるのに、別のときにはまったくといっていいほど内容を理解することができなかった。これは自分にリスニング能力を補うための背景知識が足りなかったからだと考えられる。聞き取ることができない単語はどの会話にも存在するので、話全体の意味を理解するためにはコンテクストを想像するための背景知識を身につけなければならないと痛感した。

オーストラリアでの滞在の内、最も印象に残ったことは「オーストラリアが多文化社会だ」という知識を肌で感じる事ができたことだ。オーストラリアでは大学でも街中でも、本当に多くの人種が存在している。街を歩いていると聞こえる言葉は必ずしも英語ではなく、中国語、韓国語、あるいは私にはわからない他の言語であった。同じ言語の話者同士が会話するときと、異なる言語の話者同士が会話するときとで言語をスイッチすることができるのは、彼らが high school の時点で既に第二外国語を学んでいるからだろうと思う。英語は当然としてさらに別の言語を学ぶ、ということに全く抵抗を感じていないということが日本の学生と異なる点だ。今回の滞在をきっかけに、私は自分が今までに学んでいない言語やその文化圏により興味をもつことができた。

派遣プログラムの内容において満足した点は農場や海水浴場の訪問を通じて、現地の人の生の言葉を聞くことができた点である。例えば、英語学習授業の先生は Hi, mate. [hai, mat] と発音し、農場の男性は days [daiz] と発音した。他にも、cigarette を ciggie、Australian を Aussie、relatives を rellies と省略することもオーストラリア英語の特徴だと学んだ。私は英語の方言学を専攻しているため、オーストラリアなまりの英語が実際にどのように発音されるのかにとっても興味をもっていた。そのため、シドニー大学の学生だけでなく、さまざまな年代・バックグラウンドの人と会話でき、中学高校で学んだ英語との違いを直接に体験できたことが非常に嬉しかった。

今回の派遣をきっかけに、就職後にも長期で海外に滞在したいと強く感じた。また、今回の派遣を通じて、「言わなくても察するべき」「曖昧さを受け入れる」日本文化とはまったく異なる文化圏での経験をより多く積まなければならないと感じた。派遣終了後に就職する予定の企業では積極的に海外派遣を実施しているわけではない。しかし、自分が働く企業がどのような条件・場所であっても、海外の企業や外国人と関わりが全くないということとはあり得ないはずだ。今回のように海外で生活して初めて知ったこと（物価の違い、公共交通機関におけるICカードシステムの充実、価格の表記法）は、日本社会の改善点を探すヒントになりえるため、就職後にも必要だと考えられる。2週間という短い派遣期間でもたくさんの感動と驚きを感じることができたので、より長期間海外での滞在の機会があれば、より豊富な知識と感性を持って仕事に、日本社会に向き合えるのではないかと考えるようになった。

海外での生活から得た教訓は、自分が母語でない言語を話すときに、どこまで相手の言葉を理解したのか、相手にきちんと伝えなければならないということだ。「この部分まではわかった」「ここから先が理解できないからもう一度話して」と言葉にして表すことがコミュニケーション上不可欠だ。しかし、聞き返すことで話の流れやテンポを一時止めてしまうため、実際に Could you speak again, please? と言うことが私には初め難しかった。とはいえ、相手の言葉を受け止めかつ話を深く掘り下げるためには、私の外国語能力を考えると、聞き返すことしか方法がない。そこで、相手が発した言葉を間違うことなく理解したい、という気持ちを持って聞き返すことを心がけた。すると、自然と相手との eye contact の回数が増え、お互いに全身全霊を込めて理解し合うことに繋がった。次に海外へ行っても、ぜひ実践したい。